

**課題名** 外国人留学生の大学院における学習体験が就職後のキャリア形成に与える影響：修了生を対象とした追跡調査

**研究代表者名** 尹 得霞 (東北大学大学院教育学研究科)

**研究の目的と方法**

**(1) 研究目的**

本研究は、東北大学大学院教育学研究科における学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのか、その実態について明らかにすることを問題意識として設定する。その上で、教育学研究科を修了し、日本国内及び母国で就職をした外国人留学生7名を対象とし、大学院での学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を与えているのか、遡及的に体験を分析し、留学生を対象とした大学院教育の在り方について有用な情報提供を行うことを目的とする。

**(2) 研究方法**

調査は、東北大学大学院教育学研究科博士課程前期修了生の大学院での学びの体験および修了後の社会人体験の詳細について深く追究するために、調査対象者の体験の詳細な分析が可能な質的研究法を採用した。インタビュー調査は、在学時代の学びを遡及的に辿りつつ、現在の職務体験と重ね合わせる形で、2018年10月から2019年1月の間に実施した。母国で就職をした対象者に関してはインターネットでの映像インタビューにより調査を実施した。データ収集に関しては、半構造的インタビュー (semi-structured interview) を用い、深層的 (in-depth) かつ自由回答的 (open-ended) インタビューにより、1対1で実施した。データ分析に関しては、Patton (2002) に基づく質的データ分析法により実施した。

**研究経過**

- (1) 7～8月：教育学研究科を修了した複数名の留学生へ調査依頼をし、承認を得た。
- (2) 9月：インタビュー項目を作成した。
- (3) 10～1月：調査対象者を確定し、7名の中国人留学生を対象としたインタビュー調査を実施した。
- (4) 1～2月：全てのインタビュー終了後、データ分析を行い、論文を完成させた。

## 研究成果

分析の結果、86の意味要素が得られた。そこから以下に示す10のサブカテゴリーが形成された。すなわち、「職能基盤としての基礎力の再認識」、「浸透した学ぶ姿勢」、「総合的な思考の習慣形成」、「他者との相互作用がもたらす教育力」、「思考訓練としての学習体験」、「異文化間葛藤を通じた日本理解」、「日本での組織社会化の習得」、「問題解決力の習得」、「社会人としての自己の再構築」、および「長期的なキャリア形成」である。これらは最終的に「学びの態勢をつくる学び」、「日本の視点で考える学び」、および「社会化を促す学び」の3つのカテゴリーに集約された。

## 結語

本研究では、東北大学大学院教育学研究科における留学生の学習体験が就職後のキャリア形成にどのような影響を及ぼしているのか、その実態について明らかにすることを問題意識として設定した。その上で、教育学研究科を修了し日本国内及び母国で就職をした外国人留学生を対象とした遡及的インタビューにより、大学院での学びの体験を振り返って認識する大学院教育の意義について明らかにすることを目的とした。インタビュー調査の結果、留学生にとっての大学院での学びは、「学びの態勢をつくる学び」、「日本の視点で考える学び」、および「社会化を促す学び」の3つの要素によって表される点が明らかとなった。そこでは、即効性を持つ実践力というよりもむしろ、社会人になってから学んでいく上での姿勢や物の見方、考え方を学んだ実感によって、生涯に渡って学び続ける基盤形成がなされている点がまず確認された。また、日本的な視点での発想と外国人留学生としての自身の視点からの発想の融合を見出し、それを自身の強みとして再認識することで、社会人生活の中での様々な問題解決に向けた原動力として機能させている点も確認された。更に、大学院を修了した後のキャリアに連続性を持たせた形での学びの意義も重要な意味をもって捉えられていた。それは、日本での社会人生活を視野に入れたキャリア形成であり、就職した後の企業社会の中でのキャリア形成であり、生涯に渡る長期的なキャリア形成でもあった。こうした大学院と社会人生活との連続性もまた大学院での学びの意義として再認識された点が確認された。

## 今後の課題

本研究では、大学院での学びの体験記憶が鮮明であり、かつ企業での就業体験を一定程度体験している修了生を対象者として位置づけたため、入社2年目と3年目の元留学生を中心とした調査を実施した。今後は、より長期の就業体験をもつ修了生や、多様な国の出身留学生といった対象者に対する調査を継続して実施し、東北大学大学院教育学研究科での学びが留学生の生涯キャリア形成に対する影響を検討し、留学生のためのキャリア支援教育の更なる充実に寄与したいと考える。

## 謝辞

本研究は、東北大学大学院教育学研究科、先端教育研究実践センタープロジェクト研究助成による。記して謝辞を表したい。